

Hidekazu
Kurihara

awyer

たかさき法律事務所

く り は ら ひ で か す
 弁護士 栗原 秀和

プロフィール

昭和44年館林市生まれ。太田高校～神戸大学法学部卒。平成5年より外務省勤務。平成18年弁護士登録。趣味は音楽、映画鑑賞など。



キーはバランス チャレンジ精神旺盛な正義漢

市民目線での行動を
大切に

大学卒業後、外務省に入省。栗原氏は、外交官としてのキャリアを持つ異色の弁護士だ。前職での仕事は、やりがいがあったが、国家単位の仕事を進めるうちに「自分の周りの身近な人を幸せに出来る仕事、しかも自分がやったことの結果が手に取るように分かるような仕事をしてみたい」との思いが強まり、弁護士を志した。そのときの思いが今でもモットー。常に市民の目線、その人の目線で行動することを大切に仕事に取り組む。

弁護士になって4年。「バッチを付けたら1年目も30年目もない」とキツパリ。きちんと調べて、書面を作り、理屈で戦いながら、依頼者を説得し、妥協点を探る。力量が如実に表れるところが面白い」と言い、「この人なら」と思わせる人間力も弁護士には不可欠と親しみやすそうな笑顔を見せる。

心がけているのは「バランス感覚」。依頼者からさまざまな相談を受ける弁護士は、一種のメンタルトレー

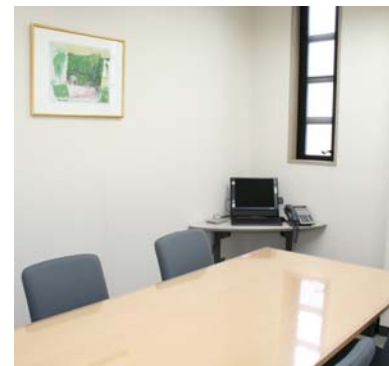
して進めていくことが弁護士の役目と話す。

一方、中小企業のリスクマネジメントについては少々異なり「予防法務には、訴訟をやっても勝てる、という自信の裏づけが必要」という。訴訟だったら負けるから予防法務、という姿勢は避けるべき。依頼者には『あの弁護士に頼めば訴訟になっても任せられる』、相手側には『あの弁護士が付いているから止めておこう』、というイメージを強めるためにも難しい案件も受けて結果を出し続けること、という。実際、ここまでこじれる前に弁護士が手立てを打っていれば、という案件が多いのも事

な姿勢で話を聞きながらも、相談者がバランスのとれた考え方ができるよう、とうまく誘導していくことを理想としている。

弁護士は転ばぬ先の杖

経験を積んだ弁護士であれば、案件を受けた時点で、勝ち筋か負け筋かの見極めはおおよそつく。だが「負けるべきものは負けた方がいい」と言い切る。その根底にあるのは「負けるべきものが勝つても本当の問題解決にはならない」という正義感。訴訟の勝ち負けではなく、根本の問題をどう解決するか、法律を道具に話を



落ちついた雰囲気の相談室

▶ DATA

所属事務所

たかさき法律事務所

TEL.027-325-9123

群馬県高崎市請地町11-6

FAX.027-325-4101

URL <http://www.takasaki-law.gr.jp>Email kurihara@takasaki-law.gr.jp

受付時間／9時～17時30分(休／土・日・祝日)

最寄り駅／高崎駅

主な取扱い分野

債権回収・強制執行

破産・再生(個人・法人)

相続・遺産分割等家事事件

交通事故

企業法務

専門訴訟(知財・建築等)



趣のあるすっきりした外観

